

新型コロナウイルス感染爆発の経験を書く

— 韓国・大邱における市民と医療従事者の手記を事例として —

松井理恵

Writing the Experiences of the COVID-19 Outbreak

— from the Memoirs of People and Medical Workers in Daegu, South Korea —

Rie MATSUI

要旨：本稿は2020年2月中旬から4月初旬にかけて新型コロナウイルス感染爆発が起きた韓国・大邱の人びとと医療従事者が書いた手記を手がかりとして、コロナ禍で地域社会が直面した問題を明らかにすることを目的とする。手記には、個人的な経験が書かれると同時に、新型コロナウイルス感染爆発によって大邱が突然差別的な扱いを受けるようになったという記述、一方で全国からさまざまな支援を受けたという記述、コロナ禍を国家が苦難を乗り越えてきた歴史と重ね合わせる記述、感染爆発の契機となった新天地教会の信者たちを他者化する記述といった、マスター・ナラティブとでもいえる物語が繰り返されていた。本稿はこれらの記述に着目し、大邱という地域社会にとってコロナ禍が、韓国という国家から切り離されそうになりつつも、つなぎ止められる経験であったことを明らかにした。そして、コロナ禍で客体化され続けた大邱という地域社会が、新型コロナウイルス感染爆発をみずからの経験として位置づけるために、新型コロナウイルス感染拡大収束後まもなく手記が執筆され、出版されたと指摘した。

キーワード：新型コロナウイルス、手記、韓国、大邱

1. 問題関心

2020年は世界中の人びとが新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた年であった。この研究ノートを書いている2020年12月現在、日本は新型コロナウイルス感染拡大の第3波に直面しており、事態収束の見通しはまったく立っていない。今日、コロナ禍の経験を書いた書物もまた世界的な注目を集めている。たとえば、新型コロナウイルスの震源地とされる中国湖北省武漢市は、2020年1月23日から4月8日にかけて約2ヶ月半にわたり都市封鎖された。武漢在住の作家である方方が、封鎖期間にブログへ書いた個人的な記録は、英語版を皮切りに『武漢日記』として世界各国で翻訳、出版されている。日本における出版企画は、方方が日記を書いている最中にすでに持ち上がっており、都市封鎖が解除された5ヶ月後の9月9日に出版された（方方、2020）。新型コロナウイルス感染拡大をめぐる経験が、同時代を生きる多くの人びとから求められているのがわかる。

本稿が取り上げるのは、韓国・大邱の一般の人びと、そして医療従事者によって書かれた手記である。2020年2月18日に1人目の新型コロナウイルス感染者が確認された大邱では、翌日には集団感染が確認され、その後、新規感染者が1日に数十人から数百人ずつ増加する、いわば感染爆発ともいえる事態に陥った。『新型コロナウイルスを乗り越えた、韓国・大邱市民たちの記録』（以下、『市民たちの記録』）と『新型コロナウイルスと闘った、韓国・大邱の医療従事者たち』（以下、『医療従事者たち』）の2冊は、大邱の新規感染者がゼロになった前後、あるいはその後に書かれた手記を集めて、地元の出版社から出版された書籍であり、間を置かずに日本で翻訳、出版された。

本稿の目的は、この2冊の手記に繰り返し現れる物語の背景から、新型コロナウイルス感染爆発に直面した地域社会が抱えた問題を読み解くことである。コロナ禍という経験は、個人的な経験である一方で、集団的な経験である。

たとえば、新規感染者数、医療の逼迫状況といった新型コロナウイルス関連のニュースは、国家、あるいは地方自治体単位の数値として人びとの元へ届く。そして、人びとの生活が国家、あるいは地方自治体という枠組みに規定されている事実を、毎日のように、否応なく突きつける。国境が封鎖される、あるいは都市が封鎖される事態となって、改めて人びとは国家や地方自治体の枠組みの強固さに気づくのである。武漢とは異なり、大邱では都市封鎖には至らなかったが、本稿で取り上げる2冊の手記からは、個人的な経験に加え、大邱という枠組みからみずからのすべてが解釈される違和感、あるいはその状況への呼応が読み取れる。本稿は、新型コロナウイルス感染拡大が経験される地域社会という枠組みから、これらの手記が感染拡大収束直後に書かれ、出版された理由を明らかにすることとなる。

2. 手記の背景

(1) 大邱広域市の概要

大邱広域市は韓国の東南部に位置する内陸都市である。ソウル、釜山に次ぐ韓国第三の都市といわれる。大邱広域市のWebページによると、2020年11月現在の住民登録人口は約240万人である。都市の人口規模としては、大阪市(人口約275万人)と名古屋市(人口約230万人)のあいだと考えればよいだろう。高速鉄道でソウルまで1時間50分程度、釜山までは50分程度の距離に位置する。

大邱における新型コロナウイルス感染拡大について考えるうえで、大邱の医療体制について確認しておきたい。15世紀ごろから朝鮮半島の東南部の中心地であった大邱圏は、多くの大学を擁する。特に、注目すべきは慶北大学校、啓明大学校、嶺南大学校、大邱カトリック大学校という、医学部をもつ総合大学が4校ある点である。加えて、近年、医療の発展とグローバル化を目指した「メディシティ大邱」プロジェクトが推進されている(『医療従事者たち』、13)⁽¹⁾。このため、医療機関や関連団体のあいだのコミュニケーションを可能にする体制がもともと存在していた。つまり、大邱は医療体制が充実している都市であったにもかかわらず、感染爆発ともいえる事態に陥ったのである。

(2) 大邱における新型コロナウイルス感染拡大の経緯

手記によると、中国と密接な関係にある職業に就いている人びとは、1月末から2月上旬にはすでに新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けていたようである(『市民たちの記録』、46-52、252-255)。しかしながら、圧倒的多数の人びとは、みずからの生活が新型コロナウイルス感染拡大によって打撃を受けるようになった分水嶺として、大邱で1人目の感染者が確認された2020年2月18日を挙げる。この日を境に、中国の武漢で起きた対岸の火事であった新型コロナウイルス感染拡大が、大邱の人びとの生活を一変させることになる。以下、この日の前後を中心として、大邱における新型コロナウイルス感染拡大状況とそれに対する医療体制について概観する⁽²⁾。

韓国政府は感染症危機警報レベルを、危機段階の低い順に「関心」(海外の新種の感染症が発生または流行)、「注意」(国内に流入)、「警戒」(国内流入後、限定的に伝播)、「深刻」(地域社会に伝播、または全国的に拡散)の4段階に分けている。2020年1月20日、韓国で1人目の新型コロナウイルス感染者が確認され、感染症危機警報レベルが「注意」に引き上げられた。その1週間後には、感染症危機警報レベルが「注意」から「警戒」に引き上げられ、保健福祉部⁽³⁾が防疫支援および感染拡大防止の体制を整えた。大邱で1人目の感染者が確認されたのは、その約3週間後のことである。韓国で31番目の感染者であったため、この60代の女性は、韓国で「31番患者」と呼ばれることになった。翌日、彼女が通っていた新天地教会の信者のあいだで集団感染が確認された。2020年2月21日、韓国政府は大邱広域市と慶尚北道清道郡を「感染症特別管理地域」に指定した。この頃から大邱広域市では一日に数十～数百人ずつ新規感染者が増加していく(図1)。大邱で初の死亡者が発生した23日には、感染症危機警報レベルが「警戒」から「深刻」に引き上げられ、政府最高の非常対策機関「中央災難安全対策本部」が設置された。29日には一日の新規感染者が最多の741人に上った。

次に、大邱の新型コロナウイルス感染拡大に対応する医療体制について概観する。1人目の感染者が確認された直後は、感染が疑われる人びとを検査できる十分な体制が整っていなかったため、医療現場は混乱に陥った。これに対して、23日にはドライブスルー診療方式が検査現場に導入された。このように検査体制が強化される一方、感染者の

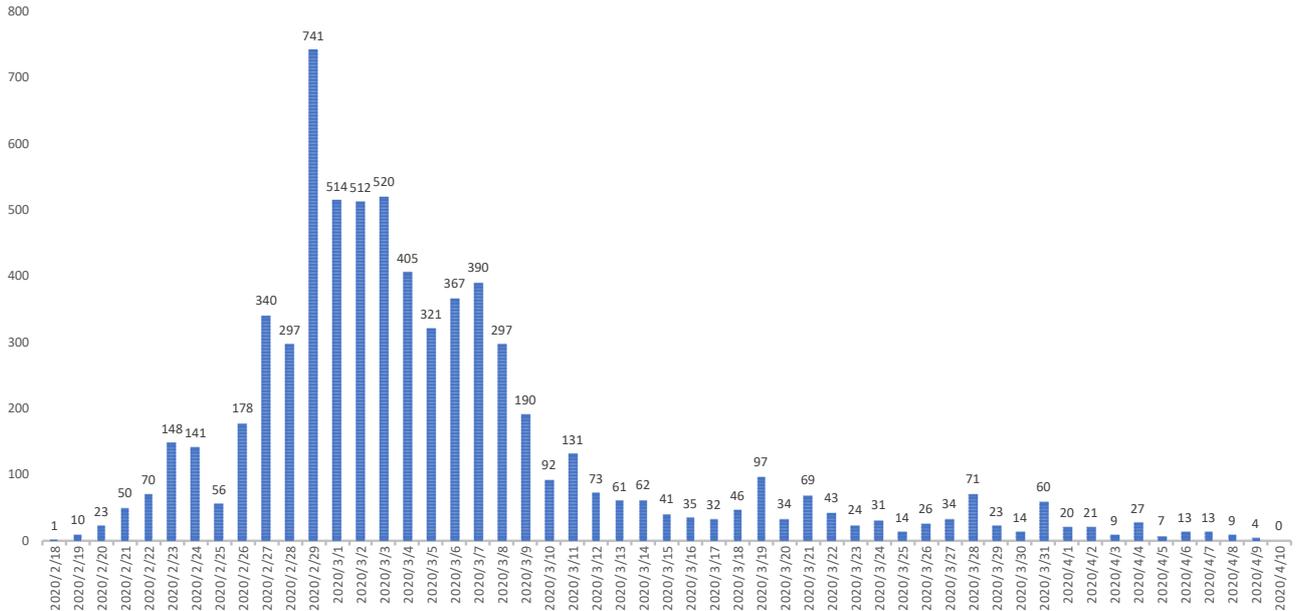


図1 大邱広域市における新型コロナウイルス新規感染者数の推移(2020年2月18日～4月10日)
(出典) 大邱広域市 コロナ19、2020、「コロナ19現況/コロナ感染者推移」のデータから筆者作成

急激な増加により医療体制は逼迫の度を増していった。27日には自宅待機中の感染者(70代男性)が症状悪化による搬送中に死亡し、重症患者と軽症患者を分け、軽症者を病院以外の隔離施設に収容する措置が急務となる。そこで、4日後の3月2日には軽症患者用の隔離施設「生活治療センター」が開設され、病院は重症患者の治療に専念できるようになった。その後も、コールセンターや高齢者のための療養型病院でいくつかの集団感染が確認されたが、4月10日には新規感染者がゼロとなり、大邱の新型コロナウイルス感染拡大は収束した。

(3) 手記の構成

『市民たちの記録』に掲載されている手記には執筆した日付が明確ではないものもあるが、大邱広域市で新規感染者がゼロになった4月10日前後に書かれたと思われる手記がほとんどである。原著を確認すると、4月17日に出版されているので、手記が書かれてすぐに出版されたと考えられる。『市民たちの記録』は「第1部 大邱の春を待ちながら」と「第2部 大邱で希望を抱く」の2部構成になっており、それぞれの手記の並びは、内容や筆者の属性によるものではなく、筆者の名前を日本語の五十音順に相当するカナダラ(가나다라)順に並べたものとなっている。第1部の筆者は全員が自営業者なのに対して、第2部の筆者は公務員や会社員が目立つ。

一方、『市民たちの記録』の出版から1ヶ月後(5月15日)に出版された『医療従事者たち』は、感染拡大がある程度落ち着いた4月下旬から5月上旬にかけて書かれた手記と考えられる。新型コロナウイルス感染拡大に対する医療体制構築過程を中心とした「第1部 新型コロナウイルスから学んだこと」、医療現場で新型コロナウイルス感染者の治療に当たった経験に焦点を当てた「第2部 大邱の医療現場から」、そして「第3部 新型コロナウイルス断想」の3部構成で、手記は内容ごとにまとめられている。

(4) 手記に繰り返し現れる物語

さて、『市民たちの記録』の編集者であり、出版を手がけた図書出版学^{ハギサ}而思^{シンジュンヒョン}代表の申重鉉は、出版の背景を次のように述べる。

やがてこの時間は過ぎ去り、人々の記憶の中で過去になる。その前に記録を残すことにした。大変な思いをした人々が、これを機に慰め合えるよう、それぞれ異なる職種に携わる大邱市民51人の経験談を集めた。全部は無理でも、なるべくたくさんの分野の声を残したかった。そうしてできたのが本書だ。(『市民たちの記録』、7)

たとえば、海外旅行専門の旅行会社を経営する市民の手記からは、真っ先にコロナ禍の影響を受け、その後も先行きが見えない状況にありながらも、あらゆる手段を尽くして事業の継続を模索する様子が読み取れる（『市民たちの記録』、46-52）。統計庁・統計開発院『韓国の社会動向2018』によると、2008年から2017年までの10年間において、リーマンショックの影響を受けた2009年を除き、韓国から出国する海外旅行客の数は毎年増加している。2008年には1,200万人だった海外旅行客が、2017年には2,650万人と10年で倍増しているのである。これは海外旅行増加の世界的な趨勢とも軌を一にするものであるが、近年の韓国における海外旅行の需要の高まりが指摘できる（統計庁・統計開発院、2018、216）。それだけに、海外旅行を専門とする旅行会社が、コロナ禍によっていかに大きな打撃を受けたのか、察するに余りある。

31番患者が目の前のアパートに住んでいたことが判明し、食堂を開けるべきか、閉めるべきか、逡巡する店主の手記からは、地域密着型の食堂を営むがゆえの困難が浮かび上がる（『市民たちの記録』、62-66）。「町内での商売は、お互いの信頼関係の上に成り立つ。どのお客さんも1ヶ月に一度は必ずやってくる人々だ。（中略）こんな町で食堂を営む私がコロナにかかったという噂が立ったら、ここを去るしかない」（『市民たちの記録』、64）というプレッシャーの中で、1週間ほどの休業をはさみつつも営業を続ける店主の毎日は緊張に満ちている。

保育園の園長の手記には、突然の休園によって生じた諸問題を、保育園、保護者、保育士のあいだの調整を通じて、一つひとつ乗り越えていく過程が描かれている（『市民たちの記録』、82-86）。韓国では、一定の条件を満たした子育て世帯は保育手当を受けることができる。保護者が専用のクレジットカードで保育料を直接決済し、保育園が決済処理をおこなうと政府支援保育料が保育園に振り込まれるという仕組みである。なお、子どもを保育園に通わせていない子育て世帯に対しては、保育手当よりは少ない金額ではあるが、養育手当という名目で保護者に支援が向けられる。したがって、保育園の突然の休園に直面して、子どもを退園させて養育手当を受給したほうがよいと考える保護者も当然現れる。すると、保育園や保育士の雇用の維持が困難になる。こうして、コロナ禍に際して保育園、保護者、保育士のあいだの調整が必要になったのである。この手記は、日本と大きく異なる韓国の保育制度の理解にも役立つ。

このように、『市民たちの記録』には、新型コロナウイルス感染爆発に直面した社会状況のみならず、韓国の人びとの日常生活を知る手がかりになるような手記が散見される。だが、読み進めていくと、同じような話が異口同音に語られているような印象が大きくなっていく。すなわち、新型コロナウイルス感染爆発によって生じた大邱に対する差別、全国の人びとから差しのべられる手によって少しずつ日常生活を回復していく過程、国家の受難の歴史とコロナ禍を重ねる記述、大邱市民の日常生活を破壊した他者として描かれる新天地の信者など、マスター・ナラティブ⁽⁴⁾とでもいえるような物語が何度も現れるのである。そこで本稿は、韓国のコロナ禍に関する論考を手がかりとしつつ、この手記に繰り返し現れる物語を検討する。

3. 新型コロナウイルス感染拡大に現れる差別と支援

(1) 大邱に対する差別

『市民たちの記録』を読み進めていくと、「大邱コロナ」、「大邱封鎖」といった言葉に代表されるような、大邱に対する差別を訴える記述が目につく。

他の地域に住む人々は大邱がまるでウイルスの温床や問題まみれの地域であるかのようにいらだたい視線で見つめた。生粋の大邱っ子として腹が立った。（『市民たちの記録』、55）

大邱を封鎖しなければならないという話が出たり、社会的に影響力を持つ人が「大邱コロナ」と称したりするほどにまで、社会は分裂と反目に突き進んでいた。全てのメディアが大邱の状況をトップニュースとして扱い始め、大邱は映画に出てくるような都市、すなわち伝説の都市のように言われることもあった。まるで人が住めない都市

として認識されているようで、湧き上がる怒りを抑えることができなかった。（『市民たちの記録』、75）

これ（大邱における新型コロナウイルス感染者の急激な増加：引用者注）にあわせて政府は、新型コロナ関連の報道資料で「大邱コロナ19」との表現を用いて地域住民の憤りを買った。「武漢肺炎」の呼び名は中国嫌悪を助長するとして「コロナ19」の名称を使えと言ったくせに、当の政府が「大邱コロナ」と言うのだから、まったくあきれたものだ。大邱は内外から押し寄せる不安に苦しみながら、同時に自尊心を傷つけられている。（『市民たちの記録』、88）

だが大邱だからといって差別され、大邱だからといって悪口を言われた。まだ大邱に対する偏見は残っている。だから他地域へ移動せず、町内にとどまろうと努めている。（『市民たちの記録』、229）

対岸の火事であったはずの新型コロナウイルスが、突然大邱で感染爆発を起こし、人びとはこれまでの生活を中断せざるを得なかった。「近所の誰かが亡くなり、あるいは家族を失った。それが私と私の家族に起きないという保証もない。職場を失い収入が閉ざされて困難に陥るだけでなく、毎日めまぐるしく変わる世の中は、明日をも予測できない」（『市民たちの記録』、147）という目前にある危機的状况に加え、政治家やメディア、他の地域の人びとによる差別的な言動が、コロナ渦中にある大邱の人びとをさらに追い詰めていったことは想像に難くない。

（2）全国の人びとからの支援

差別に直面した一方で、コロナ渦中の大邱に手を差し伸べる人びとがいたことも手記には描かれている。代表的な例は、全国から大邱に駆けつけた医療ボランティアである。大邱で初の新型コロナウイルス感染者が確認された3日後の21日には、新規感染者数の激増によって医療スタッフが不足する事態に陥った。そこで25日、大邱市医師会長が5,700人の会員に対してボランティアの呼びかけをおこなったところ、SNSで拡散され、全国から医療ボランティアが集まることとなった。つまり、医師会長は大邱の医師にボランティアを呼びかけたところ、全国から医療ボランティアが集まったのである⁽⁵⁾。医師会長の手記によると、「ボランティアに参加した医師は大邱で327人、全国から45人、計372人だが、まったく無報酬で今まで働いている。医師会に登録せず自発的に参加した人の数は把握していない」（『医療従事者たち』、145）という。そして、このような動きは、医療従事者以外の人びとにも共有されていく。

全国から大邱を助けようと集まった医師や看護師、サポートに来た公務員が大きな力になった。人知れずマスクを寄贈する人たちも現れた。ウイルスと死闘を繰り広げる医療関係者たちに心のこもった弁当や品物も贈られた。互いを励まし、応援し始めたのだ。（『市民たちの記録』、126）

しかし、国内のコロナ禍においても大邱に向かう愛の波が伝えられた。（中略）企業や芸能人、各界各層からの寄付と、「善良なビルオーナー運動⁽⁶⁾」等が全国的に広がり、支援の手が絶えることなく差し伸べられているという嬉しい知らせだ。（『市民たちの記録』、89-90）

手記に描かれているのは、このような全体的な社会状況としての支援だけではない。個人的な関係における支援、個別具体的な関係性に基づく支援についての記述も散見される。たとえば、ある女性は京畿道の従姉からの果物の差し入れ、ソウルの義理の姉からピザの差し入れを受けたエピソードを書いている。さらに、マスクが購入できない状況において、大邱以外の地域からマスクが送られてきたエピソードが続く。

大邱で新型コロナウイルス感染者が発生した当初はマスクを購入できず、人々は焦燥感に駆られていた。（中略）大邱にマスクが無いという話を聞いた長男が、ソウルの薬局で買ったと小さい包みを送ってくれたのを皮切りに、ほぼ毎日、親戚や知人からマスクが家に届いた。（『市民たちの記録』、79）

このような動きは個人的な関係にとどまらず、団体間にもみられた。『市民たちの記録』の執筆者の中には、何らかの全国団体に加盟している人、あるいは全国団体に加盟する団体で働く人がいる。そのような人びとは、自分が加盟する団体の本部から大邱支部に対して、マスクや消毒液といったさまざまな支援物資が送られてきたエピソードを書いている（『市民たちの記録』、55、80、165、180）。

以上のように手記からは、大邱におけるコロナ禍は、地域社会そのものに対する差別と支援が錯綜するような経験であったことが読み取れる。

4. コロナ禍は国家の物語となりうるのか

(1) 国家の物語と重ねて

本稿ではここまで大邱という地域社会の枠組みに注目してきたが、手記には国家の物語としてコロナ禍を描く記述が多く見られる。『市民たちの記録』の日本語版に付された大邱広域市の説明には、次のような記述がある。

大邱では韓国史の節目節目において、人々が自発的に決起し、社会をよい方向へと舵を切るための運動が起きた。例えば、日本からの巨額の借款を国民の募金で返済し経済的な隷属を避けようとした「国債報償運動」（1907）、徐相日らによる「大邱の3.1万歳独立運動」（1915年）、そして李承晩政権の独裁に反対する学生たちによる「2.28民主運動」（1960年）などがある。本書の中でも、大邱の歴史と今回の新型コロナウイルスとの闘いをなぞらえて描写しているものが数多くある。（『市民たちの記録』、11）

ここで指摘しておかなければならないのは、手記は単に大邱の歴史と今回の新型コロナウイルスとの闘いをなぞらえているのではなく、大邱の歴史の中でも国家の歴史と齟齬のない歴史のみを取り上げ、それらの歴史と重ねて新型コロナウイルスとの闘いを描いている点である。これは、手記のタイトルに歴史的な比喩を用いている例を取り上げるだけでも明らかである。「あなたがたが李相和であり、柳寛順、安重根です」（『市民たちの記録』、22-33）というタイトルにある、李相和は日本植民地時代の抗日抵抗文学の代表的な詩人であり、柳寛順は3.1独立運動で投獄され拷問を受けた女学生であり、安重根は伊藤博文を暗殺した独立運動家である。「大邱市民、21世紀の朝鮮水軍たち」（『市民たちの記録』、157-161）というタイトルにある、朝鮮水軍とは壬辰倭乱（文禄・慶長の役）の際に日本軍と戦った軍隊を指す。

このように、韓国の人びとが共有する国家の正統な歴史になぞらえて今回の新型コロナウイルスとの闘いが描かれる背景には、先述したような大邱の置かれた難しい状況があると考えられる。すなわち、差別と支援が錯綜する状況において、大邱が差別の対象ではなく、あくまでも韓国の一部であり、支援の対象であることを示すには、大邱固有の問題としてではなく、国家の歴史と重なる、国家の問題として描かなければならなかったのである。

(2) 国家の物語によって周辺化される人びと

ただし、忘れてはならないのは、新型コロナウイルスの感染爆発の渦中の大邱には外国籍の人びとも暮らしていたという事実である。統計庁の市道別外国人住民現況データによると、2019年の大邱広域市総人口2,429,940人に対して、外国人住民は53,023人となっている（統計庁、2020）。つまり、大邱広域市の人口の約2%が外国人ということになる⁷⁾。

行政の強力な安全網やネットワークから除外される移住民や在外同胞に焦点を当て、防疫と人権の関係について考察した趙慶喜は、コロナ禍で移住民が可視化されて排除されたり、韓国に暮らす在外同胞が非可視化されて無視されたりする状況が顕在化したと指摘する（趙、2020）。新型コロナウイルス感染爆発、そしてそれにとまらぬ差別に直面した大邱で、人びとは大邱があくまでも韓国の一部であることを強く意識せざるを得なかった。ゆえに、韓国の正統な歴史になぞらえて今回の新型コロナウイルスとの闘いを描く人びとがいても不思議ではない。だが一方で、このよう

なコロナ禍の描き方は、困難に陥った大邱の人びとの中でも、おそらくよりいっそう大きな困難に直面していた外国籍の人びとを周辺化する可能性がある点は指摘しておきたい。

5. 他者としての新型コロナウイルス感染者

(1) 新天地という他者

韓国のコロナ禍で可視化された社会の分断について論じた李賢京は、「今日、韓国社会では、コロナ禍の責任を問う『悪者 (scapegoat) 探し=〇〇フォビア』が公然と蔓延し、かつて無い広範囲かつ大規模な『社会断層』が生み出されつつある」(李、2020、245)と指摘する。『市民たちの記録』で「31番患者」と何度も言及される大邱の1人目の患者は、新天地教会という宗教団体の信者であり、この新天地教会で発生したクラスターが大邱の感染爆発の引き金となった。大邱での1日の新規感染者数がゼロになった4月10日までに大邱で確認された患者は6,807人で、そのうち新天地教会の信者は6割以上に当たる4,259人であった。また、地域の新天地教会の信者10,459人の全数検査の結果、40.7%の信者が新型コロナウイルスに感染していた(『医療従事者たち』、232)。この数字からは、大邱の新型コロナウイルス感染爆発において、新天地教会の信者が占める割合がいかに大きかったかが理解できるだろう。

李によると、新天地教会は正体を隠して布教する方法で知られており、韓国の主要キリスト教団から異端と規定されている。大邱で新型コロナウイルス感染拡大のきっかけとなったのに加え、全国の新天地教会信者に対する大規模PCR検査を実施するための名簿提出をいったんは拒否したため、韓国では新天地教会に対するバッシングが高まった(李、2020)。人びとの新天地教会とその信者に対する静かな怒りは、『市民たちの記録』の記述にもみられる。

国内31人目に大邱初の感染者が現れて、それが教会で(当初は新興宗教団体の新天地だとは思っていなかった)発生したと分かった時も、驚きはしたが解決するだろうと個人的に思っていた。だが、そんな個人的な楽観は新天地と聞いて崩れ去った。恐ろしかった。想像を絶する恐怖と不合理、そしてパニックが襲ってきた。(『市民たちの記録』、93)

新天地のことさえなければ、早い段階で流行を抑えることができた。困難な時ほど互いに助けあって病に打ち勝たなければならないというのに、まさかわざと台無しにしてやろうと思ったわけでもないだろうが。(『市民たちの記録』、107)

新天地の信者たちもまた、大邱に住む市民であるにもかかわらず、『市民たちの記録』には新型コロナウイルス同様、大邱の人びとの生活を破壊する、外部からの侵入者のように描かれている。次に示す、ある医師の手記からも、新天地の信者たちとの距離の大きさがうかがえる。

マスコミを通じて新天地という教団について聞いたことはあったが、自分とは関係ない遠い世界に暮らす集団のすることだと思っていた。しかし、多くの感染者を出した新天地大邱教会の信者名簿を入手した行政当局から、病院従事者に関する通知がきた。当院職員や職員の家族にも新天地の信者がいることを知り、驚いた。我々の近くに何か潜んでいて、その暗い内実はいつ姿を表すのかと恐怖はますます大きくなった。(『医療従事者たち』、169)

このように、新天地の信者たちは、地域社会の内部に存在しながらも、外部に存在するように扱われる。それは、新型コロナウイルス感染爆発によって突然、全国から差別的な扱いを受けることとなった大邱の人びとにとって、自分たちを正当化するための必然だったのかもしれない。しかしながら李は、韓国が直面する社会問題の現れの一つとして新天地教会を位置づける。李によると、新天地教会は韓国社会や既存宗教において周辺化される低所得層、高学歴、若年層の人びとを受け入れていた。つまり、韓国社会が生み出し、既存宗教が関心を向けなかった社会的弱者が新天地教会の信者なのである。コロナ禍における新天地教会への過剰なバッシングは、韓国社会や既存宗教が新天

地騒動を反社会的集団のテロ事件という特殊な事例として位置づけ、当事者意識をもって関わろうとしなかった結果と考えられる(李、2020)。敷衍するならば、大邱に暮らしていた新天地教会の信者の多くは、他でもない大邱の社会によって周辺化された人びとである。その意味でも確かに地域社会の一員なのであり、他者として切り捨てられる存在ではない。

(2) 医療現場における新天地の人びとへのまなざし

韓国社会において周辺的な立場にあったがゆえに、新天地教会に救いを求めた人びとは、コロナ禍で社会からの激しい敵意を一身に受けることになった。医療従事者たちは、このような新天地教会信者の患者たちにどのように対応したのだろうか。ある医師は「私の働いていた生活治療センターの軽症患者630人中約60%は新天地の信者で、20～30代の女性が多かった」(『医療従事者たち』、232)と書く。そして、初めて入所者を受け入れた際の様子を次のように述べている。

ところが、救急車から降りてきた入所者たちは全員、元気に旅行用のキャリーバッグを引いてくるではないか。ほとんどはこざっぱりとした身なりの若者で、女性のほうが多かった。先入観を持たないで見たら、まるで日本か中国へ卒業旅行に出かける大学生の団体みたいだ。全員がうつむいて、出迎える人の視線を避けていることだけが違った。(『医療従事者たち』、230)

そして、「医療従事者の見た新天地の信者たちは、他とまったく変わらない、ごく普通の患者に過ぎなかった」(『医療従事者たち』、235)と手記を終えるのである。コロナ禍の大邱において、新天地教会の信者たちと直接出会う機会があったのは、おそらく医療従事者だけであっただろう。それだけに、医療従事者以外の人びとの、未知の新天地教会の信者に対する怒りや恐れも十分に理解できる。だが、直接出会ったうえで新天地の信者たちを「ごく普通の患者」と書く医師の手記からは、大邱という地域社会に社会的弱者を切り捨てるのとは別の選択肢があることを示している。

6. 新型コロナウイルスと闘った経験は誰のものなのか

最後に、医療従事者の手記に焦点を当てる。日本が新型コロナウイルス感染拡大の第1波に直面していた当時、「韓国はMERSの経験があったため、今回の新型コロナウイルス感染拡大にもうまく対応できた」という報道をよく目にしたが、大邱の医療従事者の手記を読むと、ことはそう単純ではなかったことがわかる。当初、大邱全体で1人しか患者が出なかったMERSの感染管理指針に基づいて新型コロナウイルスに対応したため、医療従事者の自己隔離と病院の受け入れ中断が相次ぎ、医療体制はすぐにパンクしてしまった。そこで、MERSの対応基準を変えるのが新型コロナウイルスへの対応の第一歩となったのである。のちに、日本でも盛んに報道されたドライブスルー検査方式や、軽症患者と重症患者の分離を可能とする生活治療センターの設置は、時間的な余裕がまったくない極限の状況下で実現されたことが手記からはわかる⁽⁸⁾。

看護師は、着脱に20分程度かかり、通気性が悪いレベルDの防護服を着て業務に携わる。このような過酷な環境で勤務するため、看護師には2時間ごとのローテーションが必要であった。加えて、いつも通りの看護ができず、いつもとは異なる業務をこなさなければならなかった。いつも通りの看護ができないのは、「新型コロナウイルスに関する管理方針とマニュアルがない状態で、医療従事者の感染を予防するため、患者との最小限の接触を原則とする消極的ケアを行うようにシステムが整えられた」(『医療従事者たち』、114)ためである。ある看護師は、「彼らに心理的、精神的な面まで含めた看護をできないことがとても悲しかった」(『医療従事者たち』、115)と手記に書く。一方、普段は看護師以外が担当していた業務を任されることとなった。ある看護師は、手記に「看護業務は普段よりも減ったが、患者が他の病室に移ることになれば、患者の移動、空いたベッドの掃除、さらに食事の配膳など、本来はしない業務をしなければならず、思ったよりも体力を使うので疲れる」(『医療従事者たち』、96)と書いている⁽⁹⁾。

さて、「開放性・透明性・民主的参加に基づく連帯と協力」という原則に基づく韓国の新型コロナウイルス対策が確

立する過程を分析した玄武岩は、2020年4月15日に実施された第21回国議員総選挙における与党の歴史的圧勝の背景に、文在寅政権のコロナ対策があるとみている（玄、2020）。コロナ禍において、世界中の人びとは政治の重要性を痛感している。したがって、コロナ対策が選挙の結果を左右するのに不思議はない。しかしながら、本稿が目じりたいのは、大邱で新型コロナウイルスとの闘いの最前線にいた医療従事者が「大邱の新型コロナウイルス問題が政治利用されたのではないか」という違和感を示す点である⁽¹⁰⁾。

総選挙と絡んで、大邱の新型コロナウイルス問題は政治的に利用された感がある。問題を適切に分析しないまま、一方では自画自賛もう一方では正当に評価されることもなく政権を審判するネタにしてしまった。（『医療従事者たち、70-71』）

新型コロナウイルスとの戦いに成功した大邱の努力は韓国のイメージアップにつながり、総選挙では与党の勝利に寄与したようだ。カミュが主張した世の中の非合理性、「不条理」は新型コロナウイルスとの戦いでさらに具体的になった。手柄は政治家のものになり大邱には過ちだけが残ったとしても、再びこのようなことが起きたならその時大邱は、転げ落ちる岩を背負って一歩ずつ山頂に向かうシシュフォスの心情で、世の中の不条理に立ち向かい、不条理を乗り越えることだろう。（『医療従事者たち』、249）

大邱は野党の支持基盤であるため、大邱の新型コロナウイルス感染拡大収束が与党の勝利につながったことを快く思わなかった人が多かっただけなのかもしれない。だが、ここで本稿が焦点を当てたいのは、実際に大邱の新型コロナウイルス問題が政治利用されたか否か、ではなく、新型コロナウイルスと闘った経験はいったい誰のものなのか、という手記の訴えである。大邱の新型コロナウイルスとの闘いが、韓国の新型コロナウイルスとの闘いとされた瞬間に、大邱の医療従事者の手からその経験は離れてしまうように感じたのだろうか。新型コロナウイルスの感染拡大に直面する今日、しばしば政府と地方自治体の関係がクローズアップされる。新型コロナウイルスと闘った経験は誰のものなのか、という手記の訴えからは、政治における政府と地方自治体の関係だけでなく、より広い意味で国家と地方都市の関係が問われているように思われる。

7. 結語

本稿は2020年2月中旬から4月初旬にかけて、新型コロナウイルス感染爆発を経験した大邱の人びとと医療従事者が書いた手記を検討した。手記からは、新型コロナウイルス感染爆発によって、全国の他の地域から差別的な扱いを受けるようになる一方で、支援の手を差し伸べられる、いわば国家から切り離されそうになりながらも、つなぎ止められる経験が描かれていた。コロナ禍を国家の歴史と重ねる記述や、感染爆発の契機となった新天地教会の信者を他者化して怒りや恐れを表す記述といったマスター・ナラティブも、この、差別で切り離されそうになりながら、支援でつなぎ止められる、韓国と大邱のあいだの力学をふまえたうえで読み解く必要がある。

最後に指摘しておきたいのは、コロナ禍において差別や支援を通じて徹底的に客体化された大邱という地域社会は、みずからの経験を主体として発信せざるを得なかったのではないかと、いう点である。新型コロナウイルス感染拡大収束後まもなく、新型コロナウイルスによって、苦勞し、疲れ、傷つき、悲しみ、諦め、喜び、感謝した経験が手記としてまとめられ、出版された。これは、新型コロナウイルスと闘った経験を他の誰かに譲り渡すのではなく、他でもない大邱という地域社会の経験とすることによって、再出発するための宣言だったと考えられる。

注

- (1) 大邱広域市のWebページ（日本語版）には、新たに大邱の経済成長を牽引する産業として、医療産業（医療サービス、医療機器）を育成する方針が示されている（大邱広域市、2020）。
- (2) 以下の記述は、『医療従事者たち』の「まえがき—新型コロナウイルス感染確認からの経緯」（8-12）および大邱広域市のコロナ19

Webページのコロナ感染者推移データ(大邱広域市コロナ19、2020)を参照した。

- (3) 韓国の「部」は、日本の「省」に当たる国家行政機関である。
- (4) 桜井厚は「全体社会の支配的言説(支配的文化)を、マスター・ナラティブあるいはドミナント・ストーリーとよんで、社会規範やアイデアロジーを具現する語りに位置づけている」(桜井、2002、36)。
- (5) 筆者が2019年度学外実習で宿泊した大邱の中心部に位置するゲストハウスは、全国から集まった医療ボランティアを受け入れていた。
- (6) 「新型コロナウイルス感染症の影響により賃料の支払いが困難となるテナントの賃料を減免・猶予する動き」(『市民たちの記録』、90)である。
- (7) 総人口における外国人住民が占める割合は、韓国では約4%、ソウル特別市では5%弱であり、大邱は外国人が比較的少ない都市であると考えられる。
- (8) 大邱で1人目の感染者が確認されてから生活治療センターが開所するまでの2週間、大邱の医療体制が戦略を修正しつつ、状況に対応していった過程については、チョン・ホヨンの手記が詳しい(『医療従事者たち』、31-40)。また、ドライブスルー検査方式が確立される過程についてはソン・ジンホの手記が詳しい(『医療従事者たち』、41-45)。
- (9) 3月9日に書かれたキム・ヨンニムの手記は、医師によって書かれたものであるが、渦中の病院の様子が事細かに描かれており、看護師の置かれた状況も詳しく書かれている(『医療従事者たち』、46-51)。
- (10) 『市民たちの記録』にはこのような政治に関する記述は見当たらない。その理由として、『市民たちの記録』が総選挙の2日後に出版されており、総選挙の結果を受けた内容を反映するだけの時間的余裕がなかったことが考えられる。

文献

- 趙慶喜、2020、「韓国におけるコロナ対策と(非)可視化される人々—在外同胞・移住民を中心に」、玄武岩・藤野陽平編『ポストコロナ時代の東アジア—新しい世界の国家・宗教・日常』、勉誠出版:165-178。
- 大邱広域市、2020、「大邱の新たな成長エンジン事業」、(2020年12月19日取得、http://www.daegu.go.kr/japanese/index.do?menu_id=00935573)
- 大邱広域市 コロナ19、2020、「コロナ19現況／コロナ感染者推移」、(2020年12月19日取得、<http://covid19.daegu.go.kr/00937420.html>)
- 方方著／飯塚容・渡辺新一訳、2020、『武漢日記—封鎖下60日の魂の記録』、河出書房新社。
- 玄武岩、2020、「開放性・透明性・民主的参加に基づく先制的対応が功を奏して」、玄武岩・藤野陽平編『ポストコロナ時代の東アジア—新しい世界の国家・宗教・日常』、勉誠出版:35-52。
- 이재태、2020、『그곳에 희망을 심었네』、학이사(=李載泰編／CUON編集部訳、2020、『新型コロナウイルスと闘った、韓国・大邱の医療従事者たち』、CUON.)
- 李賢京、2020、「感染症のパンデミックと分断の可視化—コロナテスト中の韓国社会と宗教を問う」、玄武岩・藤野陽平編『ポストコロナ時代の東アジア—新しい世界の国家・宗教・日常』、勉誠出版244-256。
- 桜井厚、2002、『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』、せりか書房。
- 신중현、2020、『그때에도 희망을 가졌네』、학이사(=申重鉉編／CUON編集部訳、2020、『新型コロナウイルスを乗り越えた、韓国・大邱市民たちの記録』、CUON.)
- 統計庁・統計開発院、2018、『韓国の社会動向 2018』、(2020年12月20日取得、http://kostat.go.kr/sri/srikor/srikor_pbl/3/index.board?bmode=download&aSeq=372048&sort=1)
- 統計庁、2020、「市道別外国人住民現況」、(2020年12月21日取得、https://kosis.kr/statHtml/statHtml.do?orgId=110&tblId=TX_11025_A000_A)